

新潟県に災害をもたらした主な気象事例

(羽越豪雨) 昭和42 (1967)年8月28日から29日にかけての大雨

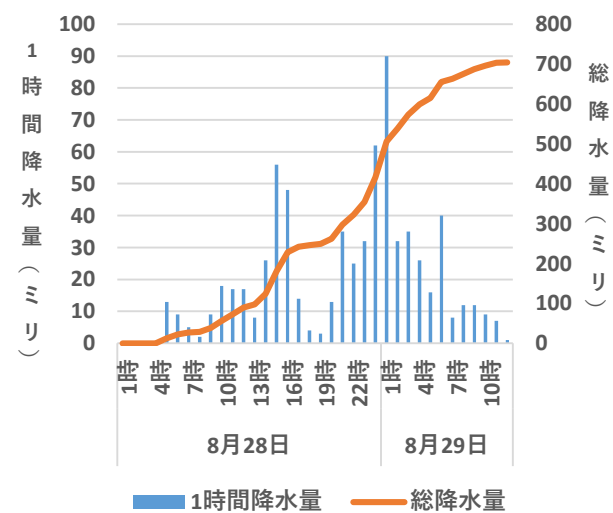
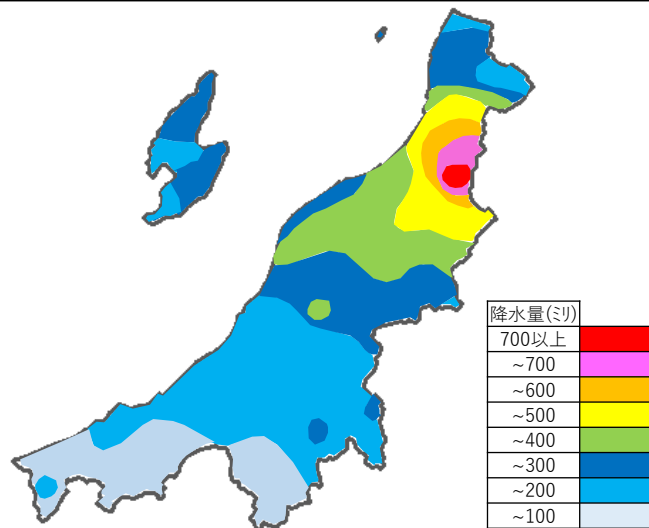
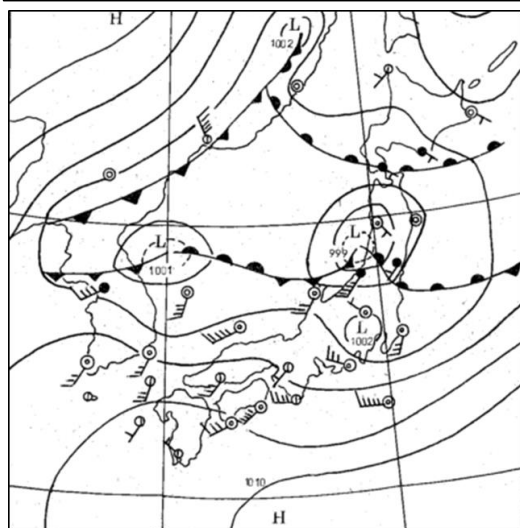
前線の停滞や低気圧の通過で下越を中心に大雨
～荒川や胎内川など多くの河川が氾濫し、大水害が発生～

【概要】

昭和42 (1967) 年8月26日から29日にかけて日本付近には前線が停滞し、27日と29日には前線上の低気圧が三陸沖へ進んだ。前線や低気圧に向かって太平洋高気圧からの暖かく湿った空気が流れ込んだため、これらの活動が活発となり、主に新潟県の下越や山形県の南西部で大雨となった。大雨のピークとなった28日から29日は、下越を中心に1時間あたり30ミリ以上の激しい雨が断続的に降り、特に28日の日降水量は胎内市中条で437ミリ、村上市三面で329ミリを観測するなど、複数の地点で当時の観測史上1位の記録を更新した。また、26日9時から30日9時までの総降水量は胎内川第1ダム（現、胎内市下荒沢）で748ミリを観測した。

この大雨によって荒川や胎内川、加治川で氾濫が発生したほか、下越の中小河川の大部分でも氾濫が発生した。また、山沿いでは土砂災害が発生し、崩れた土砂が降った雨とともに押し寄せた。これらにより、死者・行方不明者134人、住家全壊1080棟、床上浸水16422棟などの甚大な被害が出た。

(被害状況は、新潟県地域防災計画 資料編による)



地上天気図 昭和42年8月28日21時

総降水量分布図 昭和42年8月26日9時～30日9時

胎内川第1ダムの1時間降水量の推移